九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

上海で京劇を

日下, みどり
九州大学

https://hdl.handle.net/2324/16097

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成. 21, pp.2-3, 1999-06. 九州大学大学教育研究センター
バージョン：
権利関係：

上海で京劇を

日下（くさか） みどり

京劇の魅力

昨年五月より十か月間上海に滞在していたが，そのおかげで様々な体験をすることができた。なかでも有意義だったのは，毎週週末には京劇を観る（中国では“京劇を聴く”という）事ができたことである。日本ではなかなかお目にかかれない貴重な舞台も観ることができたが，面白い舞台で値段も安い（安い席は10元か20元。１元＝13円だから安すぎるほどである）のに，雨の日や演目によっては後の方で空席がめだつこともあり，すこし寂しい気持ちにさせられた。

京劇にはすばらしい魅力があるのにこれは実に残念なことである。ここではそういった舞台の魅力と京劇の観方について少し紹介してみたい。

逸夫舞台について

上海の「天蟾京劇中心逸夫舞台」は，昔からある有名な京劇の舞台で，この舞台を踏まぬ役者は一流ではない，と言われるほどの格式を誇っている（金子光晴が上海に居た時にこの舞台を描いた絵が残っている）。上海に行く機会があったら是非一度，ここで京劇を御覧になることをお勧めしたい。常時，その月の演目を書いたパンフレットを出しているので，それを貰って観たい劇をチェックすることができる。有名な作品『白蛇伝』や『四郎探母』などはまず当たり外れがないだろう。ほかに『三国志』の物語を脚色した『群英会』や『空城計』，さらに『水滸伝』系列の『野猪林』などは面白さが保証できる。

京劇を楽しむために

何でも，予備知識はあったほうがいいだろうが，京劇を観るときは，まず下調べをしてゆくことをお勧めしたい。中国人でも，唱の部分を聴いて分かる人は少ない。そのため，舞台の両脇には字幕が出るようになっているので，それを見れば意味は分かるものの，とっさの理解は難しい。唱の意味が分からなくても筋を追えるように，あらかじめ芝居のストーリーを頭に入れておいたほうがよいだろう。もっとも，複雑なストーリー展開はなく，だいたいの話は観客も知っている事が多いので，外国人でも簡単に理解できる。それでも少しでも内容を知っていると面白さが違ってくるだろう。

なお，たとえ言葉がわからなくとも，微妙な節回しやすばらしい声，見事な立回りやアクロバット，さらに豪華でエキゾチックな衣裳などは，それだけでも十分観る価値はあると思われる。

二通りの『白蛇伝』

慣れてくると，舞台を観比べて楽しむことも出来るようになってくる。同じ作品でも役者や演出が変わると出来上がりが異なるのは当然であるが，私の観た『白蛇伝』もそうであった。

先に上海で今人気絶頂の女優史敏（シーミン）が白娘子（白素貞）を演じたものを観たが，姿の美しさといい，声の素晴らしさといい，さすがに見事な出来ばえであった。その後まだ若手の奚鳴燕という女優と，王凱という役者（13～４歳くらいの少年で，まだ声がわりもしていないが，声，仕種，容姿，すべてそなえており，いかにも前途有望な俳優といったおもむきがあった）の『白蛇伝』をみた時は，また印象の違う面白さがあった。

原作ではどうしても，妖魔が純真な青年をたぶらかす，といったおもむきがあるが，史敏の演じた白娘子はうぶな青年が一目でのぼせあがるのももっともといった妖艶な美しさがきわだち，イメージにぴったりのはまり役であった。

しかし，まだ若い奚鳴燕の白娘子はまた違っていた。

彼女の演じた白娘子は仙界で何百年も修業を積んではいるが，下界のことは何も知らない世間知らずのお嬢様。雨やどりでたまたま知り合ったハンサムな許仙にぽっとなってしまい，一途な恋に身をこがす，といった「乙女の純情」が初々しくてよかった。なるほど，同じ作品でも，こんなに違って見えるのか，と感心し，舞台を観ずに脚本だけを読んでいると，こういうところが分かりにくいのが欠点だなと反省させられたものであった。

上海グランドシアターの完成

上海人は外国好きで知られるが，そんな彼らの願いは，オペラも上演できる国際的な劇場の建設。というわけで，98年に西洋のオペラやオーケストラも呼べる「上海大戯院」（上海グランドシアター）が完成した。こけらおとしはイタリアの歌劇団による『アイーダ』。この出演者リストに上海雑技団の名もみえた。不思議に思って聞くと，王の凱旋のパレードのなかに，サーカスをしている雑技団の姿があったそうだ。ちゃんと中国人も参加しているところがみそである。

せっかく上海にいるからには，ぜひ一度このグランドシアターでオペラを観てみたい。そう思った私はフランスの歌劇団が来て『ファウスト』を上演した時，チケットの申込の電話を掛けた。ところが，肝心のチケットのお値段は，と聞くと「600元（約１万円）」とのこと。あまりのことに驚く私に電話の相手（20歳すぎの若者のようであった）は，「歌劇を観るんだろう，600元は高くないよ」と言ったものである。平均月収500元の国での話である。さすがは上海，お値段の方も国際価格というわけだ。もちろん，丁重にお断りした。友人と二人で観に行けば1200元。これは一か月ゆうに暮せるお金である。中国人の懐具合はわからないとつくづく不思議に思ったものであった。

そのかわり，二月に新作京劇の名作『曹操と楊修』がかかった時はいちはやくチケットを手に入れた（一番前の席で130元）。内容は評判どおりのすばらしさで，大いに満足させられた。曹操役の尚長栄は国宝級の名優で，唱も演技も見事であったが，相手役の何澍もそれにひけをとらぬ堂々の名演技で，難しい心理劇を重厚に演じていた。

グランドシアターはさすがに国際級の劇場だけのことはあって，なかなかの豪華さであったが，何より驚いたのは遅れて来た観客のための控え室があったこと。中国のマナーの悪い観客（遅刻は当たり前。物は食べる，大声で話はする，携帯電話は掛ける，床に唾は吐く，といった有り様）に慣れた身には，文字どおり革命的に思われた。もし機会があれば，ぜひここでの観劇をお勧めしたい。

文化を消費する贅沢

実をいうと，京劇は観ていて退屈する時もあった。三時間ほどぶっとおしで聞いていると（間で休憩の入る時もあるが）どうしようもなく疲れてくるのも事実である。そんな時は私も，まわりの（マナーの悪い）観客と一緒になって，少しうたたねをしたり，ポットのお茶を飲んだり，用意していたお菓子や果物を食べたりして時間をつぶした。そうやってぼんやりと観ている間にも舞台では，数秒の仕種をするのに十年かかるという芸を俳優が必死に演じている。そんな時ふと，私は自分が今とてつもない贅沢をしていることに気がついた。

私はその時，伝統に培われた貴重な芸を，流しっぱなしのシャワーのように無雑作に浴びていたのである。このように，文化を惜しげもなく消費してゆけることこそ本当の贅沢というものであろう。

その素晴らしい一瞬を止めることのできない舞台上の芸術は，その場で味わう他はない。名優の名演技に出会った時の興奮と感激（万雷の拍手にハオ，ハオの声が雨と降る）は何ものにも換えがたい喜びである。中国に行った時はぜひ京劇を観にいって下さい。名舞台にめぐりあえたら，それはこの上ない幸せといえるでしょう。

（比較社会文化研究科）